

岩手県におけるナラ枯れ被害状況について

岩手県林業技術センター 上席専門研究員 小岩俊行

1 ナラ枯れとは

ナラ枯れは、ナラ菌（*Raffaelea quercivora*）という病原菌が、カシノナガキクイムシ（以下「カシナガ」）という媒介昆虫によって、樹木、特にナラ類に感染して引き起こされる、「ブナ科樹木萎凋病」という植物病害である。

2 被害の現状と特徴

岩手県では、平成 22 年に奥州市でナラ枯れ被害が確認されて以来、懸命の防除を行ってきたが、被害は依然として継続・拡大している。特に、沿岸部で被害が急速に北上し、県北の洋野町まで被害が拡大している。

沿岸部の被害は、通常のナラ林を中心に拡大していくナラ枯れ被害とは異なり、リアス式海岸の半島から半島を飛んで渡ったような被害経過となっている。また、被害は、海に迫った急斜地に生育しているミズナラにも拡大し、防除を極めて困難にしている。

3 発生生態

ナラ枯れ被害の伝染環は次のとおりである。6 月下旬ころから、ナラ菌を保持したカシナガが被害木から羽化・脱出し、健全なナラに穿孔を始める。このとき、穿孔傷からの揮発物質、カシナガからのフェロモンによって誘引され、集中的な穿孔（マスアタック）が起こり、大量のナラ菌が樹体内に持ち込まれる。樹体内では、ナラ菌が伸長・まん延して通水障害が生じ、急激にナラが枯れていく。枯れた木の坑道内ではカシナガの次世代が育つ。翌年、ナラ菌を保持した次世代の成虫が羽化・脱出する。

岩手県内でのカシナガの初発時期を調査すると、県南に比べ県北で初発発生時期がやや遅い傾向や、沿岸中南部で県南部とほぼ変わらない傾向がみられた。また、カシナガは通常 1 年 1 化生であるが、最近、部分 2 化虫の発生が確認され、感染木増加への影響が考えられた。

被害木の枯死経過をみると、県北の先端地域では、9 月に入ってからカシナガの穿孔が増加し、枯死せずに早期落葉という形態で越冬する感染木が存在していた。このような現象は、駆除木の選択に大きなバラツキを生み、徹底駆除の阻害要因のひとつと考えられた。

4 ナラ枯れの防除

防除は、「駆除」として、伐倒くん蒸、立木くん蒸、チップ化などの処理が行われている。また、「予防」は、殺菌剤の樹幹注入、薬剤散布が行われている。さらに、面的防除として、「カシナガの密度低下」をねらった「おとり木誘引捕殺法」、「おとり丸太誘引捕殺法」などが実用化されている。その他に、「ナラ林の伐採による更新」や「被害木の薪利用」なども行われている。

当センターでは、薬剤防除の実証として 2 種類の薬剤（殺虫剤と粘着剤）の散布試験を実施し、2 種類の薬剤の効果が確認されている。

5 ナラ林の取扱

岩手県では、防除の実施に加え、安全なナラ類の利用を図るため、「ナラ枯れ被害材等の移動に関するガイドライン」を定めて、被害拡大に注意した利用をお願いしている。